

令和5年度第2回周南市総合教育会議会議録

- 1 日 時 令和6年3月22日(金) 開会:13時00分
閉会:14時23分
- 2 場 所 周南市岐山通1丁目1番地
周南市役所4階 庁議室
- 3 出席委員 藤井律子市長 厚東和彦教育長 松田福美委員
片山研治委員 岡寺政幸委員 吉本妙子委員
- 4 事務局 企画部長 企画部次長(企画課長) 教育部長
教育部次長(教育政策課長) 生涯学習課長 人権教育課長
学校教育課長 学校給食課長 中央図書館長
- 5 書 記 教育政策課(担当課長補佐 主査)

6 協議事項

(1) 市長あいさつ

発言者	発言内容
市長	今回は「子どもたちを取り巻く教育環境について」をテーマとする。 近年、コロナ禍をはじめ、私たちの社会は大きな変化の中にある。 教育の世界においても「多様性の時代」「SDGs」「教育のICT化」「少子化」「教員の働き方改革」「部活動の地域移行」などといった話題や課題が取り上げられている。 しかしながら一方で、教育は変化だけでなく、同時に不易(ふえき)(変わらない本質的な価値)の部分大切にしていけることも必要と思う。 皆さんは様々な立場や経験、思いを持っておられるので、今回は、1人ずつの委員の思いや考えをお聞きし、それを基に全員で意見交換をしながら進めていきたいと思う。 その前段として、最初に教育長から今回のテーマについての思いをお話したい。

(2) 前段

発言者	発言内容
教育長	今日のテーマが子どもたちを取り巻く環境ということだが、周南市は「2050年を乗り越えられる周南市になる」というパーパスを掲げている。 パーパスの実現がゴールではなく、その先の未来も当然乗り越えられる周南市であり続けるということが求められている。そのためには、未来を担う人材を育成し続けていかなければならない。本市の未来を担う人材には、確かな学力、豊かな心、健やかな体、チャレンジ精神や逆境を乗り越える力、それ以外にも忍耐力、コミュニケーション力、発想力や実行力なども求められている

	と思う。 子どもを取り巻く主な教育環境である家庭・地域・学校が、子どもをまん中に据えた教育における信頼のトライアングルを構成し、生きる力や生き抜く力を育成するためにはどう関わっていけばいいのか、また、市や教育委員会が家庭・地域・学校をどうサポートするのかということを真剣に考え、実践していくことが、パーパスやその先の未来の鍵になると思う。 2050年に30代から40代となり、社会の中核を担う世代は今の小中学生。そして、それを引き継ぐ世代は、これから生まれてくる子どもたちである。 世代に関する資料として、本市の児童生徒数の推移があるが、平成6年に17,687人いた児童生徒が令和5年は1万人を切る9,738人となり、概ね半減しているのが現状。 さらに、国立社会保障・人口問題研究所が発表したデータによると、本市の5歳から14歳の概ね小中学生に該当する年代の推計人口は2050年になると5,653人になるということで、こちらも2020年の11,020人と比較して概ね半減という未来が示されている。 我々が何の手立てを打つこともなく、この推計人口が現実のものとなった場合は、将来の担い手不足、あるいは市全体の活力の減退というものは避けられないと思う。パーパスの実現のためには、子どもたちの主な教育環境である家庭・地域・学校がこれまでの教育や子どもとの関わり方というものを尊重しながらも、そこに未来という視点を加えて見直すことが今求められている。 つまり、私たちは今、教育における戦略の転換点に立っているのではないかと思っている。未来という視点を加えた家庭・地域・学校の教育環境、人的な環境や物的な環境だけでなく、考え方や発想の転換といった思考の環境も含めて、子どもたちにとってより良い教育環境とはどのような環境がいいのかということを皆さんからご意見いただきたい。
--	---

(3) 協議内容

発言者	発言内容
松田委員	昔から取り組んでいることだが、学校教育の中では自ら学ぶ力を育てる授業、教育が大変必要であると改めて感じる。そのためには授業が変わる必要がある。 「先生は様々な子どもがいるなかでどのように授業しているのか」と聞かれた時に、昔はどこかに焦点を当てて、いわゆる平均的なものを持ち上げていこうとしていた。ある程度の成果も出ていたが、現在これだけの多様性が重視される世界で、改めて子ども達一人一人を見ると理解や活動がみんな違う。一人一人を大事にしていくためにはどうしたらいいかということも考えなければならないし、これから先の子どもたちを育てるためにどうすればよいかということも考えないといけない。 先日、周南公立大学でリカレント教育、自分を高める教育の必要性という話を聞いた時に、未来の社会を生きていく人たちは自ら自分の力で学び直し、自分のキャリアというものを形成していくことが求められてくるという話があり、大事なのは学ぶ力だと思った。 自分で学ぶことが、これからは更に必要になり、子どもの時から取り組んでいかなければならないと思った。 これまでの日本の教育では、不登校の子ども達は自分に合う場所を見つけることができなかったり、自分の学びの仕方に対応できなかったりした。学校だけではなく家庭が原因のこともある。 授業は教えるのではなく学ぶということになると、一人一人を見なければならぬし、子どもがどう考えて学んでいこうとするかを見なければいけない。手を出さずに待たないといけない。子どもは元々能動性があり幼児は自ら遊びを開発する。これを小・中・高等学校とつなげていくことが学ぶ力になると思う。そのためには授業改善、先生がゆとりを持ち適切な対応ができるための働き方改革が必要。 あとは、子どもたちが自分たちだけで過ごす時の子ども同士の影響力は大きい。少子化のため学校の規模の縮小により、人数が少なく固定された人間関係となることが気になる。現在これだけ多様性が求められる中、いろんな人に出会って刺激をもらい揉まれることが大切。 変革期に来ている。いろんな教育現場の話や子どもの育ちを見た時に、変えていく時期を見逃してはいけないという思いがある。
片山委員	私の母が教員の時は、半世紀近く前で今の時代とは全然違う。平均的な子どもを育てる、とは違うが、一方的な授業のやり方で授業を進めていたと思う。 それから時代は変わり、特にここ数年のコロナ、ICT や世界のグローバル化などにより子どもを育てていくための環境が変わり、それに打ち勝つための子どもを育てるためにはどういった授業をする必要があるのかということで、先

	生の働き方改革は必要である。 目標を数値化することは難しいが、進め方を分かりやすくするために何か指標があるとよい。
松田委員	子ども一人一人の個別目標を作り、伸びを見ていくという対応に変わってきてはいるが、なかなか対応しきれてないこともある。 昔と変わらない授業もある意味必要かもしれないが、自分で課題を見つけて自由にやってみる時間をつくるなど、学校の中の時間配分の見直しについて学校全体の意識改革が必要。 学校の授業、就職、地域での経験など、人生において様々な場面で自己決定が必要。 失敗した時にそれを受け入れるおおらかさが欲しい。
岡寺委員	地域との関わり、親としての立場から意見したい。 今日話を聞いていて皆さん同じ考えだなと思うのは、自ら考えることの大切さ。 価値観が変わってきている。学びは真似るとよく聞くが、昭和の時代、先生には絶対的な価値があった。自分が学んだことを真似て教えていくと思っていた時期もあったが、環境が変わると価値観が変わる。 昔のままの思考ではだめということを認識しないといけない。親も学ばなければならない。しかし学び方が分からない。改めてそんな話をしたことがないため、思考として意識することが少ない。 みんな関係者で保護者なのに、意見を聞いても、熱心な PTA 執行部など他の人に聞けばわかるのではという他人事の意見。 これからの周南市の教育を考えたときに「ふるさと教育」が一番良いのではないか。それに向かって何をしたらよいかを考えたほうがいろんなことへの合点がいき理解が進むと思う。 そのためには、今の教育をどうしたらいいか、ふるさとをどう捉えたらいいのかを考えた時に、親も子どももどういう学びをしたらいいのかを考えるとよい。それが当事者意識に繋がるのではないか。 もう一つ地域のことで言うと、ごく一部の方が熱心にやっているという実情がある。現役の保護者は忙しくなかなか動けない現実もある。リタイアされた方など地域の人もしっかり関わられるような仕組みというのを提示する。 自分たちが生きているこの場所をどう捉えて、自分の未来を考えるかがこれからの教育なのかなと思う。そのためには周りを巻き込む仕組みづくりが大切。アイデアを出し合ってやることができるとよい。楽しくないと人は集まらない。
吉本委員	子どもが自立するために、大人は全面サポートするというのが一番大事だと思っている。自分の周りで起きていることを自分ごととして捉えられるかどうか。そういう想像力を養うことがとても大事だと思う。

	例えば、自分とは異なる意見があるとき、まず聞いて知ることが一番大事。相手がなぜそう思うのか、どうしてそのように考えるのか、なぜ意見が異なるのかということを深く考え、なぜその人がそのような発言をしているのかということを考えながら、自分の言葉で自分の意見をちゃんと伝えるということが必要ではないかなと思う。それが自分の中で問う力考え抜く力。 そうすると、お互いの意見が違うということが相手を攻撃しているわけではなく、自分が攻撃されているわけでもなく、お互いを尊重しているんだということが理解できるようになると思う。 また、たくさんの方と関わることで、好奇心がどんどん芽生え、いろんな体験が積み重なっていくと、その人となりで、どんどん広がっていくのではないかなと思う。 最近の新卒で入ってきた若者は、自己承認欲求は非常に強いがとても打たれ弱い。本音で話すことを避ける傾向がある。自己承認欲求については、おそらく最近の SNS の「いいね」とか「映え」とか上辺だけの評価に慣れてしまっていて、本質を捉えることに慣れておらず苦手なのかなと感じる。 企業も学校も社会の構造と同じで、今後はますます多様性が広がっていくと思う。その中でも不登校児童生徒、外国人の方というのも多くなってきており、それが今後当たり前になっていく世の中で、それを受け入れるためにも、地域と保護者が学習して、そういったことが当たり前ということを理解していくことが必要だと思う。 子どものことは全て学校がやってくれているという認識でなく、まずは家庭教育が一番で社会教育があって、そして学校教育があるということを皆さんに意識してもらう必要があると思う。 また、本当に支援が必要な子どももいる。その場合には、専門家と一緒にチームを組んでサポートするべきと考える。専門家にサポートしていただき、教員の皆さんは本来やるべきことに集中するということが必要だと思う。そのための費用も必要となってくる。 企業も当然専門家チームにすごくサポートしていただいている。顧問弁護士、税理士、社会保険労務士、産業医、廃棄物を扱っているとその特別な法律があるため、行政書士の方にもフォローしていただき、不測の事態が起きた時にすぐに対応でき、相談相手がしっかりいるということで、何かトラブルがあった時にも小さいうちに解決することができる。専門家と一緒にチームを組むことがとても大事。 最後に大人たちが子どもたちと一緒に周南の未来を語る、ビジョンを語ることがとても大事。企業にも経営理念があり、ブランディングも経営者だけが考えたのでは意味がなく、社員と一緒に作りあげることが自分たちの会社を大事にすることにつながることも同様に、周南市のパーパスを基に自分たちはどうなりたいかを大人と子どもが一緒に話す機会をもっと設けた方がよいと思う。
--	--

松田委員	ふるさと教育と学校教育は共通点があり、今からどう変えていくかという視点がいっぱいある。 授業の中でも自分ごととして捉える機会がある。小学校の低学年は知識も学ぶが、自分だったらどうするかを考え、先生達も授業で意識してやるようになってきたし、やらないといけないと思ってきているがなかなかできていない。 ふるさと教育について、知る、分かるだけではなく、自分事としてふるさとがどうなったらよいかを考えるなど一歩先まで考えることができるとうい。 巻き込むことが大事。そこからはじめるとよいと思う。 共通認識が大事。
教育長	知るということが後ろを向いている。後ろのことを学んでいる。知るだけでなくどうしていったらよいかなど前にいかないといけない。色んな考えを持ち、前を向いて歩いていくことが大事。
市長	ビジョンを語るということが大事。
吉本委員	人口推移を見たときに愕然とした。実際の数字を見ると衝撃的で本当にどうにかしないとけないと思った。
松田委員	人口だけでなく、学校数、学級数もとても少なくっている。学年がひとクラスしかなく人数もとても少ないところが結構ある。小学校6年間環境変化がない。
吉本委員	小学校の機能として適切な人数があるという話を聞くまでは、少人数でも誰一人取り残さないことが美しいと思っていたが、ある程度の人数がいて、社会性ができる。そこで学びを得ることが必要と考え、再編成も色んな意見があるとは思いますが、思い切ってやっていくことも必要だと思う。
複数	難しい問題ですね。
岡寺委員	学校を集中して、人を集めた方がよいという思いもある。バスを出してやっていくという考えはあるのか。
市長	現状で一番配慮した形でやっていると思っている。バスで通うことができるところはまだ良い。人を集めるだけが課題ではない。地域というものはそんなに簡単なものではない。
松田委員	心配なのは、今ではなく今後さらに減っていくこと。将来を見越して考えなければならない。小規模校にも良さがあって、目が行き届き、地域連携も行いながらやっている。ただ将来を視野に入れておかないといけない。 子どもが育つときにある程度の人数、多様性に触れることが大事。学校の中だけでなく、交流学習の場をつくる、同世代の人といろんな経験をする必要がある。 行政がそこを考えながら地域との連携を保つ方法もあると思う。人数が少なくなったときに考えるのではなく、その前に施策を考えておく必要がある。
市長	行政は施策を持っている。遠い将来、近い将来と今を組み合わせながら考えていかないとけないが、計画どおりに行かないのが学校。他の施設よりも

	さらに難しい。
松田委員	行政だけでなく、自分たち一般市民も意識しないといけない。
吉本委員	何かがあったときに市がどうにかしてくれるとか学校がどうにかしてくれるという考え自体を変えていかないといけない。大人も子どもも自立していかないといけない。
市長	2年前にパーパスを発表するときも受け入れてもらえるだろうかという心配があった。しかしみなさん共鳴してくださった。パーパスを基に予算や施策を立てた。将来を見渡すという点において行政はしっかりしている。教育が同じようにできるかは分からない。教育における信頼のトライアングルに加え周南公立大学の知の力を利用しながらやっていく。学校の統廃合の目的を明確にしてやっていく必要がある。この会が出していくべき結論かもしれない。
松田委員	休校となった際には、地域の方は子どもの将来や地域のことを考えて決断してきたと思う。行政もそれを考慮して決断してきたと思う。それを周りが理解しておくことが必要だと思う。 今日のように、将来を見据えて今何をしていく必要があるかを意識的に考えていくことが大人の責任。子どもが自立するために必要な環境を考えていかないといけない。
教育長	2050年を考えたときに今の子どもたちが30代40代となり頑張っている世代となっている。打たれ弱いではなく、頑張れる人になるためには、今種をまかないと将来につながらない。そのために今何をする必要があるかを考えていかなければならない。これから先子どもの数が減っても、2050年よりさらに先の未来もずっと支えていくことができる子ども達を育てるためにも、小中学生のときに何ができるかを考えていく必要がある。それが今だと思う。
松田委員	打たれ弱いということは教師、地域、企業も心配している。
吉本委員	今の世の中、全てがハラスメントになってしまい、管理者も言いづらい。腹を割って話したり、指摘したりできない。褒めることも叱ることもできない。物事を本音で話すことができなくなっている。活性化しない。
岡寺委員	それは家庭でも悩んでいること。友達がこう言っていると子どもから聞いた時にどう対応すればよいか分からない。学び方を学んで共有できないと、対応方法が分からない。みんなで話しだすと気づきだす。みんなで話す機会を作ってまちを耕すことが必要。人間関係の希薄さが少しでも密になればよい。
吉本委員	人間関係の希薄さはコロナがきっかけとなった悪い例かもしれない。
松田委員	楽しいから、知り合いがいるから参加するということは大事な要素。話すときに相手を否定しない。失敗や変なことを言っても認めていく。経験の繰り返しをさせる。幼稚園保育園では、自由な活動の場で、寄り添い必要な時は介入し、自発的主体的に活動していくことがその後も継続するとよい。保護者もそういう関わり方ができると自分の意見が言えて、対応方法も自分で考えることができる子どもが育つと思うし、逆境でもなんとかできるようになると思う。

片山委員	そのような状況のときに、家庭・地域・学校がバランスよく連携できるとよい。 打たれ強くということについて、反対に攻撃性につながる場合があると感じる。お互いに意見を出し合い、自分と違う意見をどうくみ取り反応するか。打たれ強く育てることは大切だが、攻撃性を持たないようにお互いの立場を尊重し合うことが大事。
吉本委員	そのために想像力が大事になる。その人がなぜその話をするのか、背景には何があるのかを考えながら話をするのが大切。攻撃するということも、SNSなどで想像力が足らずに発言してしまうことが多いのでは。
片山委員	家庭・地域・学校のバランスが大切。子どもの見守りなど地域の人たちが一緒に子どもを育てていこうというコミュニティがある。地域の中で工夫しながらやっているところはたくさんある。中山間地域では少子化対策をどうするかを考え、三丘は子どもの声が聞こえる地域を作っていこうとしている。鹿野でもそれに近いことをやっているがなかなか成果がでない。だが子どもが減っても活力のある地域にしてくれたためにどのような地域になったらよいかを学校と地域が連携して取り組んでいる。 周南地域は環境が良い。大学、多くの企業もある。活躍している人もたくさん輩出している。そのような人たちの力も借りながら、情報発信していくとよい。
市長	コミュニケーションという言葉が出てきたが、お互いに話す、隣人と話すことも少なくなり、自治会総会をやってもなかなか人が来ない。話すということは、人の意見も聞くが自分の意見も言う。その行ったり来たりの関係を訓練する場が身近な近所や学校の PTA にある。種を植え付けるところがたくさんあったはずが、コミュニケーションの場が減ってきて、種の数が減り、収穫が減る。その子が大きくなったときに、松田素子さんの本「わたしは樹だ」の中にでてくる、種が屋久島の杉に成長していくときに倒れないように絡み合って大きくなるということを思い出した。みんなが助け合って、絡み合ってきれいな森になる。 その森をどのようにつくるかが我々の仕事だと思う。
松田委員	とても大事なこと。みんなが絡み合うという視点が何にでも必要。学校教育の中で、子ども同士を絡み合わせていくことが年齢相応に育っていくために必要。そういう視点を持って授業ができているか。
吉本委員	働き方改革の話で、先生が学ぶ機会と先生同士の共有する時間が大切。そのために学校現場をどうするか。
松田委員	教師の立場で言えば、みんなが絡み合う学びの場を作ればよい。ただ、それをやる時間がない状況を改善するために働き方改革をしないとイケない。 生き抜く力を付けるために周南市は人材も場所もある。視点を持って取り組むことが必要。

教育長	学校の授業は変わってきつつある。以前は、先生が話して終わっていたが、子どもが一人で考え、それをグループで共有し、学級全体で共有するということになってきている。工夫する先生が増えてきた。
松田委員	どういう力を育てていくかを意識的に考える必要がある。
教育長	先生たちにとって子どもたちをフリーにすることはなかなか難しい。コントロールできないとどうなるのだろうと不安に思ってしまう。
吉本委員	保護者の意見もそこにはある。
松田委員	親もフリーにする勇気がない。
教育長	幼い子の言葉が育つには、一方通行の言葉ではだめであると本に書いてあった。コミュニケーションがないと育たない。動画コンテンツなどを見せると、いろんな言葉を知るが、生きた言葉として子どもたちに定着しない。リアクションややり取りが行われる中で、生きる言葉として子どもたちの中に育ってくる。
松田委員	同年代でのやりとりや周りの見本も大事。新しい言葉により考える力を育てることも必要。
教育長	学校の先生は、言葉で教えている。
松田委員	教える方法だけでなく、学ぶ子どものタイプや時間に合わせることを大事にしたい。世の中に出たときに自分で考えるために体験を取り入れた教育課程が必要。
教育長	学校という場所は、正解が用意してあり、その正解にどうたどり着くかを主に勉強してきた場所。正解がない授業を作っていくことは大変だと思う。
松田委員	今からは必要になってくる。
市長	先生によって違いが出て来るのではないか。教師のなり手不足の中でますます厳しい社会になってくるのではないか。
松田委員	どこの世界も自分で切り開いていく人が先導していく。
市長	山口県全体を見ると、下関や岩国の人は、九州や広島の学校に通うことができると言われていた。しかし、周南からもいろんな分野で活躍する人を多く輩出している。そのような人たちに市内で活躍してもらうためにはどうすればよいのかも考えていかないといけない。
松田委員	ここでもよく話にでているが、外に出ていく人に周南で力を発揮してもらうためには、どうすればよいか。愛着を持つ、ふるさとを知り、思いをもって行政や地域に関わり、思いを発揮できる場所があること、やりたいことができることは大切。
吉本委員	安心して言える、チャレンジできることが大切。 一度外に出て、外から自分の街を見ることも大事。戻ってきてもらえるかだ と思う。周南市を俯瞰してみるができると思う。こうしたらよいという発想を持って戻ってきってくれることを期待している。
市長	片山委員のお母さまが、ふるさとを歌うときに「志を果たしていつの日にか帰らん」は果たして帰るのではなく、果たしに帰るんだといつも言われていた。

	大事なことだと思う。 そのための受け皿が地域であり、市は働きたい場所を作っていくことが必要であり義務である。
吉本委員	周南公立大学に来た学生には、そのまま残ってもらえるとよい。
松田委員	よそから周南市に来たが、いつの間にか周南市が故郷になった。それは、魅力があり様々な要素があるからだと思う。子どもも人のつながりがあたたかく、声をかけてもらえるのがうれしい。帰ってこようかなという気持ちになると言っていた。 やはりふるさと教育。
岡寺委員	ふるさと教育にも様々な印象がある。未来に向けてのふるさと教育の場合、今を知り築道(ついで)することで、自分が誇れるふるさとにするにはどうすればよいかを考えることができるのではないか。アイデンティティですね。周南市出身と自信を持って言えるような生き方ができるようになってほしい。
松田委員	多方面で活躍する自主的な団体・サークルを聞くようになってきた。テーマをもってイベントをする機会が増えてきたと感じる。
教育長	周南公立大学も頑張っている。
松田委員	浜田敬子さんの「リカレント、リスキング教育」を聞いた。話だけでなく、参加することや参加者の様子を見ることも良いと思った。
市長	知的活動に自分も参加しているということが自分を満たすと思う。浜田先生の話についていこうとすることがすごい。スピードにだんだん慣れてくる。自分は勉強したという満足感が出てくる。
松田委員	一緒に参加した40代の女性が、久しぶりにこのような講演をきいて明るくなったと言っていた。知るという機会がなかったのでよかったと言っていた。
市長	ふるさとに一生懸命に英知を持ってきてくださる方の話を受講する研修会がたくさんあるとよい。
教育長	与える力は大きい。
松田委員	市民センターの講座もたくさんあり、市内全体に情報発信されており、選べるということはいいいこと。
教育長	大人たちに学びが広がっていくことはいいいこと。子ども達にも浸透していくとよい。周南公立大学でオープンキャンパスをしているが高校生が対象であることが多い。小・中学生対象もあるとよい。小・中学生のころに大学の様子を知りインプットして、キャリア教育ができるとよい。
市長	遠い未来と近い未来の両方を見ることが子どもたちにも必要。 女性が年を取ったとき、自分の人生が正しかったか判断できないと言われている。しかし、孫ができたときにすくすくと育つ様子をみて自分の生き方は正しかったと認めることができる。 孫を見ることができるのは自然界で人間だけ。祖父母の力をうまく利用できるかどうか。自分も孫には言いづらいつと感じることもある。おせっかいを認める

	社会が必要。
吉本委員	おせっかいというのは気にかけてもらえているということ。
松田委員	孫には直接言いづらいが、親と祖父母の話を孫は聞いている。家庭での会話は子どもにかなり影響する。 祖父母も昔の感覚を変えていく必要がある。
市長	自分の意見を自由に言える社会ではなくなりつつある。
吉本委員	間違いをおおらかに認めてあげる社会になるとよい。
教育長	親世代は共働きが多くなり、とても忙しい。なかなかコミュニケーションをとる時間がない。
吉本委員	地域のリタイアした世代が力になればよいが、何かあったときのことを考えると不安があり難しいところもある。
教育長	つい動画コンテンツなどを見る時間になってしまう。
松田委員	児童クラブに通うことが昔はためらう風潮もあったが、今はワンクッションの役割となり良いという意見もある。しかし、他の人に任せっぱなしはいけない。
市長	そうですね。子育ての一番大切な役割は親がしないといけない。そのために親のサポートなどの環境づくりも必要。
松田委員	不登校児童生徒の数が少なくなるようにしていく必要があると思う。
市長	こどもがたくさんいる街を作っていけないと思った。先生、地域、中山間、企業、保護者それぞれの立場から皆様の思いをお聞きする機会を引き続きつくっていきたいのでご協力をお願いしたい。